

Title	書評：片岡栄美・村井重樹編『ブルデュー社会学で読み解く現代文化』晃洋書房、2024年
Sub Title	
Author	松下, 優一(Matsushita, Yūichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.85- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

片岡栄美・村井重樹編『ブルデュー社会学で読み解く現代文化』

晃洋書房、2024年

松下 優一

本書は、ピエール・ブルデューが提供した文化社会学のための分析道具を初学者に向けて解説しつつ、現代の文化状況に合わせてその有効性を吟味しつつ、音楽・若者・食・SNSといった現代文化の諸領域において主として量的調査データに基づく計量分析でもって実演してみせる、という実に野心的な一冊である。全体で150頁程度、軽くて持ち運びやすく、いかにも大学生向けのテキストのような体裁で差し出されてはいるものの、かなりの内容が盛り込まれている。全体の印象としては、日本でブルデューに依拠して文化社会学研究を推進してきた気鋭の著者たちが、各々のテイストを週替わりで展開するオムニバス講義といったところだろうか。あいにく本書の「はじめに」には各章の概要がないこともあり、以下は、あくまで書評者の「知覚・評価図式」によるダイジェストおよび所感である。

まず第1章「ブルデュー社会学への招待」(村井重樹)では、「各章で展開される、ブルデュー社会学にもとづいた文化研究を理解するために必要となる基本的な概念や見方」(p.1)、ハビトゥス、社会空間と資本構造、文化資本、美的性向、場と卓越化、象徴闘争などを手際よく整理し、その視座が示される。続く第2章「文化的オムニボア(文化的雑食)とは何か」(片岡栄美)では、そのブルデュー社会学の視座の有効性について、とりわけ1960・70年代フランス社会のように文化的序列性も社会階級との対応関係も自明なものではなくなった現代社会において、どう文化と階層の関係を考えるべきかをめぐって提起されてきた「文化的オムニボア」論、さらに「新興文化資本」に関する議論などの研究動向が紹介され、ファスト教養が隆盛する現代社会を視野に入れた課題と展望が示される。ここまでの前菜だとすると(前菜というにはだいぶ重たいのであるが)続く5つの章がメインディッシュ、ブルデュー社会学に依拠して4つの文化領域を俎上に載せた分析が展開される。

第3章「文化資本の揺らぎと境界感覚の測定」(南田勝也)では、改めてハビトゥス概念から現代社会における卓越化の条件の揺らぎに至るまで、たとえ話を通じてわかりやすく解説されたうえで、現代日本の音楽愛好者たちはどこで自己の選好を強化する「境界感覚」(向き／不向きの線引き)を経験するのかというピンポイントの問いが立てられ、定量調査データの分析を通じた検証が試みられる。その中であぶりだされるのは、レコード・CDショップに通い、ジャンル分けされたコーナーの前に立つという身体的実践がもつ(もっていた)意義である。音楽趣味も含め、現代の若者の趣味活動全般に関して幅広く捉えようとするのが、続く第4章「大学生による『趣味の良さ』と階層意識、ハビトゥスの関係」(片岡栄美)である。全国の4年制大学生に実施した2018年のアンケート調査結

果をもとに、自分は趣味が良いと思うか、「趣味の良さ」と「趣味の幅広さ」は連動するか、趣味が良いと自己判断する者は具体的にどんな趣味活動の実践者であるのかといった趣味活動のありようをデータ化、多重対応分析でその趣味の差異空間を描き、その社会空間との関係を探るべく、世帯収入や父学歴など次々に変数を入れ替えて検討が重ねられていく。

続く2つの章では、食について扱われる。第5章「食の実践・卓越化・正統性」(村井重樹)では、「グルメ」から「フーディー」へという食を趣味とする人々の実践のありようの変化(オムニボア化)を踏まえ、現代社会において様々にみられる食をめぐる象徴闘争の研究への展望が拓かれる。第6章「食の好みと社会階層」(片岡栄美・村井重樹)では、2019年に著者たちが実施した「文化と意識に関する全国調査」で得られたデータをもとに、現代日本における好きな料理のタイプに関する「食テイスト空間」が描かれ、年齢・性別・学歴・職業・世帯年収といった社会的諸条件との対応関係が検討される。

第7章「ソーシャルメディアにおける文化実践と社会空間」(瀧川裕貴・水野誠)では、Twitterにおいては「音楽・アイドル」「ゲーム」など趣味の話題が圧倒的多数を占め、もっぱら趣味のコミュニケーションメディアとして機能しているという著者たちによる調査結果の紹介に始まり、オンライン上に展開される世界がひとつの文化的実践の場として捉えられること、そこに「実社会空間の社会的差異や格差がいかんにして組み込まれているか、その結果として実社会空間の再生産にどのように影響するか」(p.126)という研究課題を設定しうること、デジタルデバイド論の文脈で「情報資本」「情報ハビトゥス」などの概念が提起されていることなど、当該分野におけるブルデュー社会学に依拠した研究動向が示され、後半部では疑似予測法によるツイート分析から社会空間との関係について検討される。

さて、こうまとめてみるとすっきりした感じになってしまうのだが、本書を読みながら、諸々の感銘を受けつつも、どうも独特の読みにくさを帯びているように思えてならなかったというのが正直な感想である。「はじめに」で「ブルデュー社会学の視点に立つ文化研究を初めて学ぶ人にもわかりやすいように、その鍵となる理論的・方法的な考え方や研究の流れを平易に解説するとともに、それらをいくつかの文化領域に当てはめて分析を進めている」(p. i)というからには、初学者向けのテキストという位置づけである。たしかにブルデューの概念用語にかんする解説は手厚い(特に第3章前半のたとえ話は明らかに学部生向けで分かりやすい)のだが、現代の「いくつかの文化領域に当てはめて分析を進める」という段になると、計量分析に伴う別のハードルが現れる感がある。各章で展開される文化研究を理解するのに必要というなら、調査方法や分析手法(とりわけ多重対応分析)、『ディスタンクシオン』における研究の流れや本書のそれに関する解説も同等の手厚さで必要ではないだろうか。また、本書の特徴として「ブルデューの文化分析の切り口を(中略)社会・文化状況の変化を踏まえて、再考すべき余地があるものとして捉え返そうとしている点」(p. i)も挙げられているが、だとすると本書には①ブルデュー社会学で現代文化を読み解くという方向性と、②現代の文化的状況に合わせてその有効性を再検討しようとする方向性(ブルデュー社会学では必ずしも読み解けない現代文化)、という二重性が孕まれていることになる。いわば現代文化という素材に対して、包丁の切れ味を示すと同時に、その切れ味の悪さを示すというデモンストレーションが行われていることになるのだが、この相反する「賭け金」も、初学者向けには複雑なものを生み出しているの

ではないだろうか。

本書で示される現代文化の読み解き方に関しては、もっぱら量的調査で得られたデータの分析を通じてマクロに現代文化のありようを把握しようとする研究への道であり、その中心にあるのは文化的実践と社会階層との対応関係が現代日本でも成り立つかどうかの検証であるように見受けられるのだが、『ディスタンスション』は量的研究であると同時に、同じ写真に対する人々の反応の違いによって「美的性向」を浮かび上がらせたり、人々が語る生活史を通じて階級的位置の刻印を帯びた「知覚・認知図式」のありようを示したりといった具合に、写真や語りを通じて文化的実践と社会階層の関係をきめ細やかに描き出す質的アプローチの書という側面もある（だから一般読者にも実感として理解しやすい）。第6章で今後の課題として言及されているものの、現代社会において旧来の文化的序列性が自明性を失い、卓越化のゲームのありようが変化しているなら尚更、人々の眼に映る文化的・社会的世界をあぶりだすような質的研究が求められているともいえる。ある文化的な場に参加する当事者の語りを通じて、そこにどのような象徴闘争が発動し、卓越性を発揮する文化資本がいかなるものかをミクロに捉えるような道筋もまたブルデュー社会学で現代文化を読み解くのに有効であるように思われる。本書は初学者に向けて『ディスタンスション』の魅力の半分しか伝えていないという見方もある。

そうした位置取りの問題も気になるところだが、結局のところ「ブルデュー社会学で読み解く現代文化」という表題を掲げた本書は、どこまで現代文化のありようを読み解くことができたのだろうか。やはりオーバービューとして、各章でなされた文化領域ごとの議論や分析結果を受けて、現代文化をブルデュー社会学で読み解くことの可能性と限界ないし困難に関する暫定的な総括がほしいところである。というのも各章に見え隠れしている、文化と社会階層の対応関係が明確に出てくるとは限らないというその困難にこそ、読み解くべき現代社会・現代文化の特徴が浮上しているように思われるからだ。たとえば第3章で言及される文化のデジタル化・ネット配信化は、文化の所有感覚を変容させ、文化的正統性の序列を平準化し、「客体化された文化資本」を揺るがしているという指摘、あるいは第7章の分析の結果から見えてくる（というかよく見えてこない）情報空間と社会空間の関係を通じ、情報化は『ディスタンスション』で提示された当時と比較して、文化と階層の関係の何をどう変えていることになるのかという考察の領野が拓かれているように思える。

本書は現代文化を念頭にブルデューからの文化社会学の射程を考えるうえで学ぶところの多い一冊であることに異論はない。但し、それがどこまでどう伝わるか、読者の性向が試されそうである。

（まつした ゆういち 法政大学兼任講師）